

## 「故郷・宮城県復興の一助になれば」 熱き思いを胸に地元の食を全国発信

石巻専修大学2期生であり、地元・石巻で東日本大震災を経験している遠藤伸太郎さん。

転職を重ねて老舗パン粉製造商店に入社し、そして同社が取り扱う商品に魅力を感じて社員の立場で会社の営業譲渡を受け、社長となる。その後、地域の食材を活用した新商品企画を開発・展開しながら、郷里の認知度向上と支援に貢献しています。

株式会社かね久  
代表取締役  
**遠藤伸太郎さん**  
(平6・石基礎)



石巻市内、旧北上川の前で

えんどう・しんたろう●1971年生まれ、宮城県出身。石巻専修大学の2期生として理工学部基礎理学科に進学。1994年に卒業した後、建設業の株式会社丸本組に入社。1997年に転職したクボタ環境サービス株式会社に在籍中に父が亡くなる。その後、父が専務取締役を務めていた富士國産株式会社に入社。その後、M&Aを目的として金久商店に入社し、2014年4月営業譲渡を受け、株式会社かね久を設立、代表取締役に就任。

### 父の死をきっかけに 自分を見つめ直す

大学入学から社会人4年目くらいまでは、深く考えることもなく流されるままに過ごしていました。学生時代も卒業後も実家住まいだったこともあり、どこかに甘えがあったのだと思います。そんな考え方が大きく変わる転機となったのが、父の死だったのです。

振り返ると、石巻専修大学へ進学したのは、実家から近く、指定校推薦で行けたことと新設校の2期生というところに魅力を感じたことが理由です。小学生から高校まで柔道をしていて、高校では国体にも出場しましたが、大学では続けるつもりがなかったので他大学からのスカウトは断りました。柔道一色だった反動もあったと思いますが、大学では柔道愛好会の設立にこそ携わったものの、アルバイトや遊びに精を出した4年間。思い出というと、友人と北海道へ卒業旅行に行ったときススキノでぼたくりにあったことや、卒業研究で北上川の水質調査を行う際に川へ落ちてしまい、真冬の北上川を泳ぐことになったことなど、学生の自分とは程遠いものばかりです。

卒業後は地元の総合建設会社に就職しましたが、社会人としての自覚もおぼつかないまま3年在籍し、環境系の会社へ転職。どちらもやりがいのある



平成29年度「新しい東北」交流会・企業による復興事業事例 顕彰式にて

職場ではあったのですが、その当時は仕事に対する情熱がとりわけ強いというわけでもなかったように思います。

ただ、会社を移る前に妻と婚約し、結婚式が近づいてきたとき、父がくも膜下出血で倒れたのです。一命はとりとめたものの植物状態となり、こちらの問いかけに返事をしてくれることはないまま1年ほど後に亡くなりました。

このような状況になり、ようやく自分の新しい家族のこと、母のこと、これからのことを真剣に考えるようになったのです。仕事一筋で生きてきた父の姿勢を継承する決意をし、父と同じ食品業界を生業にしたいという願望が膨らんできたのも、この頃からでした。

こういった思いを実現するため、父が亡くなった翌年の4月、父が務めていた会社へ転職し、父と同じ営業職に就いたのです。

### 最悪のタイミングだった 東日本大震災

そして、父の死から11年後、現在、私が代表取締役を務める株式会社かね久の前身である金久商店から、事業譲渡の話を持ちかけられたのです。実は、

兄が経営する会社の顧問税理士の方が、同社の顧問税理士も務めていた縁です。

金久商店は飲食店などのニーズに合わせて100種類以上のパン粉を製造・販売しており事業は安定していましたが、後継者がいないことから廃業を検討していたといいます。しかし、同社が製造・販売しているパン粉は、お客様ごとにカスタマイズされた一品であり、商売をたたんでしまうと多くの飲食店が困ってしまいます。

私も「いつかは経営者に」と思っていたこともあり、前向きに検討するためにも内情を知ろうと社員として働くことにしました。実際に働いてみて、この会社はなくしてはならないと痛感。もし金久商店のパン粉がなくなると地域の飲食店が本当に困ってしまうことがヒシヒシと感じられたのです。

ところが、いよいよ年度末に株式譲渡によるM&Aを実行しようとしていた2011年3月11日、東日本大震災が発生したのです。

震災時、仙台にいた私は、すぐに石巻で暮らす家族に連絡しましたが、妻と子供2人の無事は確認できたものの、長女の行方が分からない、と。そこま



発売から2年で約25万個の販売実績のヒット商品「牛たんコロケ 仙台味噌仕込み」



社員の旨みを閉じ込めた商品設計の「三陸産大粒かきフライ」。2018年約50万個の販売実績



日本一の生産量を誇る気仙沼産ふかひれを使用した「ふかひれ姿煮中華味」

で聞いたところで電話が繋がらなくなってしまったのです。心配のあまり気持ちは焦るばかりでしたが、交通インフラが壊滅状態でなかなか戻りません。ようやく戻って目にした故郷の姿は衝撃的で、家は流され、思い出の中にある街の風景は跡形もありません。あまりのショックから気持ちのどこかで戻るのが怖い、現実を知るのが怖いという思いがわいてくるほどでした。

幸い長女とは別の避難所で会うことができたのですが、子供たちと兄弟のように育った仲の良い甥と2人の姪は犠牲になってしまい、本当に、ついこの間までの日常が、現実のものだとは思えないような状況でした。



## 前を向くきっかけは 周りの人の支え

少し落ち着いて仕事のことを考えられるようになって、M&Aは無理だなと感じていました。自宅を担保に資金を調達する予定だったのですが、津波に流されてしまい住むところすらなかったからです。

もう一度、気持ちが前向きになったのは、金久商店の代表の温かさに触れたことが、きっかけの一つです。石巻に暮らせなくなった私たち家族が仙台へ移り住むまでの1~2カ月ほど、お宅へ迎え入れてくれたのです。本当に苦しいときに温かく手を差し伸べてくれた社長の恩に報いたいと思い、そこで暮らし、少しは気持ちが落ち着いてきたとき、故郷である石巻のためにできることはないかと強く思うようにもなりました。幸いなことに事業承継



2019年12月4日に開催された「みやぎフードサミット2019 in 仙台」。かね久と食のみやぎ応援団が食品メーカーのマルコメ(株)と連携して企画・監修。宮城県の食品製造会社とマルコメがコラボした宮城の食を発信し、多くの来場客でにぎわった



石巻専修大学創立30周年記念式典の前日、会場となる石巻グランドホテルのロビーで、尾池 守石巻専修大学長と記念撮影

という形で金久商店の事業を引き継ぐ道筋がついたこともあり、かね久を設立できたことで、こういった思いを現実のものにしようという決意へと変わったのです。

その表れの一つが、新たな事業の立ち上げです。具体的には、地域商社として、宮城県の豊富な地域資源を全国へ発信していくための商流の新設・拡大と商品設計に取り組んでいます。

商品設計というのは、たとえば、マルコメさんの「大豆肉」と宮城県のいわしのすり身を使いコラボレーションさせてヘルシーなハンバーグを企画するなど、県外の企業と地元の資源を扱っている企業とを商品設計という形でつなげるビジネスです。専修大学校友会名誉会長の甘竹秀雄さんが相談役を務める株式会社アマタケともコラボしています。「東大寺と東北」開催記念駅弁の企画で地元メーカーの総力を合わせて開発した期間限定の駅弁「黄金の食彩弁当」のおかずの一つ「鴨入り肉だんご」を提供いただいたのですが、専大ならではの縁もでき、自分も校友でよかったと実感しています。その後、この駅弁がきっかけとなり、鴨入り肉団子や金華さばの海鮮生ふりかけが東北新幹線・北海道新幹線グランクラスに採用されていました。

ほかにも、宮城県産のカキをおいしくフライにするための衣を設計して大粒カキフライをつくり、全国規模の飲食チェーンで展開したり、魚からとれるDHAなどをサプリメント会社へ原料として供給したりもしています。

この新規事業を通じて関わった企業すべてが幸せになるだけでなく、宮城県の認知度向上と復興支援のお手伝いができればとも思っています。そのために、一般社団法人食のみやぎ応援団も立ち上げて、営利目的ではない立場で宮城をアピールするために、「みや



仕事の話になると、語り口にも熱がこもる。今後の展開として、東北へのインバウンド誘客につなぐ「東北観光×東北食材のコラボレーション」企画をはじめ、2020年には三陸産かきの新規需要獲得をねらう新商品「牡蠣クリスマス」発表も

ぎフードサミット」などのイベントを企画・実行したりもしています。

## 次は、自分が誰かを 支える存在に

東日本大震災を乗り越えるのは容易なことではありません。宮城県の復興に向けた活動は今もなお続いており、昔の姿を取り戻したとは言い難いのが現状です。それでも頑張っただけで、また今も頑張り続けられるのは、大切な家族や会社を支えてくれる社員のみなさんの存在と、何としても成し遂げたいと思える使命があるからです。そして、私たちが一生懸命知恵を絞る、汗を流して開発した商品を喜んでくださるお客様の存在が大きいと痛感しています。

また、父の死をきっかけに自分を見つめ直し、父と同じ食品業界でやっという覚悟を決めたことがスタートだったのだとも思っています。

今、過去に立ち返ってみて、あらためて父の存在の大きさと、「こうなりたい」と思える背中を示してくれたことに感謝しています。

そして、今度は私自身が誰かを支えられる存在になればと思っています。

(談)